

第8回「土地と力」シンポジウム  
「BEING ALIVE 生きるとは何か——芸術人類学の視点から」  
発表要旨・キーワード

「22才の旅」 | 港千尋

今年の4月、外出できない期間がつづくなか、ぼくは多くの時間をフィルムやプリントの整理に費やした。写真は撮影よりもずっと、選択や整理に手間がかかる。1980年代初めのネガやポジはいままで手を付ける暇がなかった。当時ぼくは学部の3年生、大学を1年休学して南アメリカへ出発したのだった。カメラは2台、レンズは28mmと50mmの2本だけ。スライドをかけると、彼方にいたはずの人や顔や風景が、挨拶する。まるで昨日会ったばかりであるかのように。やあ、どうしてる？と。

『22才の旅』

出演：港千尋

撮影／編集：齋藤彰英

\*\*\*

「生命と非生命のダンス」 | 金子遊

「渚と森のフォークロア」部門では、映画監督の七里圭氏に依頼して、映像作品「La boussole」（羅針盤）を制作して頂いた。その作品の鑑賞を通して、社会人類学者のティム・インゴルドにとって「生きていること」や「つくること」が何を意味するかについて考えたい。

質的な変化をつづける生命と非生命の姿をとらえる方法を、インゴルドは「アートの人類学」ではなく「アートと人類学」だという。鑑賞者は「アーティストの旅の道連れになり、作品がこの世界で展開していくのを作品とともに見る」。なぜなら作品の生命はその素材に根ざし、すべての作品は完成することではなく、完成されたあとでも生きつづけるからだ。

『La boussole』（羅針盤）

監督：七里圭

ドローイング／パフォーマンス：吉増剛造

音楽：檜垣智也

## 「極を生きる」 | 安藤礼二

極東の列島である日本は、南も北も無数の島の連なりを通じて世界にひらかれている。北の島々にはアイヌと総称される人々が生活していた。近代に至るまで大規模な農耕を採用せず、国家というまとまりを作らず、豊かな自然環境を利用した狩猟採集を基盤に、しかし広範囲な交易を行いながら独自の文化を維持してきた。さまざまな問題を孕みながら、ようやく国立の博物館も整備されたいまあらためて、「北」へと向かう一人の旅行者という視点に立ち、空間的かつ時間的な「外」から、極東の列島としての「日本」が育んできた文化や芸術とは一体何であったのか人類学的に問い直してみたい。

『極を生きる』

制作：安藤礼二

\*\*\*

## 「グランギニョル未来 2020」 | 榎木野衣

新型コロナウイルス感染症のパンデミックによって、世界はあつというまに目に見えない壁だらけとなった。世界中の美術館が、まるでなにごともしなかったかのような展示を残して、次々と閉鎖され、「見に行くことができない展覧会」が当たり前のことになった。福島県の高濃度放射能汚染地帯＝帰還困難区域内で「見に行くことができない展覧会」を継続していた私たち（赤城修司、飴屋法水、山川冬樹、そして私）は、芸術人類学的な関心から、これまで一年に一度のペースで現地を訪ね、その記録をとってきた。その渦中で起きたコロナ禍は、放射性物質を吸入しないために着用してきたマスクの意味も、180度変えてしまった。万が一感染の場合、体内から排出される恐れのあるウイルスを拡散しないためにこそ、必需なものとなったのだ。マスク一枚を境に、体内が表裏でひっくり返る。だが、放射能もウイルスも目に見えない。目に見えない世界がますます私たちの生を制御し、私たちは目に見えない世界に突き動かされる。これはその世界の転回を帰還困難区域を軸に圧縮して追ったドキュメントである。

キーワード

「見に行くことができない展覧会」「世界・マスク・仮面的転回」「相対性表裏」

『グランギニョル未来 2020』

写真／映像：赤城修司、飴屋法水、西島亜紀、山川冬樹

テキスト：榎木野衣『グランギニョル未来』より

声の出演：飴屋法水、山川冬樹

編集：山川冬樹

## 「Persistence is Grace」 | 平出隆

2020年の初めから夏にかけて、個人的に経験された「死別」を見つめなおしながら、「人間と人間の距離の変化」、「生と死の境の変化」、「類としての純粹意識の変化」を考え、感覚しようとする。そこに論を求めず、ここでの「変化」とはなにか、をひたすら見つめる。映像は杉谷論。だれにも等しく訪れる死について、透過光の持続イメージとその残像の凝視、および時間軸の中で生成変化してゆく記憶をリテラルな吊いとして眼差す。その一人一人が世界を透視するかのよう。

キーワード

「変化」「距離」「境」「吊い」「記憶」「純粹意識」

“Persistence is Grace”

For Akemi Shibutani, Yoshikichi Furui, Ikuo Hasegawa, Mikio Yamamoto, Takashi Okai, Chiyoko Kawasaki, and Hajime Tomosada, those who all have died in this period

Text and voice by Takashi Hiraide

Directed by Satoshi Sugitani 2020

\*\*\*

『芸術人類学講義』からの言葉：ユーロ=アジア文明を生きる「生命デザイン」の思想 | 鶴岡真弓

この春、奇しくも世界各地でパンデミックが明らかになった3月、芸術人類学研究所から、これまでにない芸術・思想の根源を解明する、新書『芸術人類学講義』（筑摩書房 ちくま新書）がリリースされました。私たちは本書の編者・著者として、地球の主人公であると豪語してきた人類が、いまこそ「芸術」の根源に降りゆき、「生きとし生けるもの」の一員として生きなおす方法と思いを、本書に込めました。

そこで今回はこの新しい書に象嵌された言葉を引用しながら、ユーロ=アジア世界の諸民族の「生きること」から生まれた、「生命デザイン」をめぐってお話します。

ユーロ=アジアをつらぬく美の文明史 所長 鶴岡真弓

『生きていくということ』『芸術人類学講義』：鶴岡真弓編 からの言葉（ちくま新書）』

制作：鶴岡真弓